

タンチョウ博士のお話（第11回）

今回は第10回からの続きです。風前の灯になったタンチョウの運命は…！？

また、日本や世界にいるタンチョウの数、寿命など〔中小〕都築楓太さん、〔北小〕谷和珠さん、〔南小〕小坂穂乃かさん、〔西小〕中谷結さん、〔舞小〕ひぐちあおいさん、〔長中〕北友翔さん、〔長高〕白川真紀さんなど45名の方からいただいた質問にも回答します。

〇ぼくたちも千羽鶴！

紙芝居のおじさんの話は、ヒーローがあわや！というところで、その日はおしまい。次におじさんが来たとき、ヒーローは危機を脱し、大活躍する話になる。

そんな“紙芝居”みたいなことが、ぼくたちの身に起きたんだ。

百年ほど前、日本で野生のぼくたちを見た鳥の学者は、一人もいなかった。だから、ぼくたちは絶滅したと思われた。

ところが、釧路湿原の片隅で、ぼくの仲間を20羽ほど見かけたヒトがいて、大正15年に報告書を書いた。そこで大騒ぎになり、ヒトはドジョウなどの餌を撒いてくれたりした。でも、それまでヒトはぼくたちの敵だったから、あまり近づかないようにした。そのため、昭和15年ころも、ぼくたちの数はせいぜい4～50羽と思われていた。

ともかく、釧路の冬は“しばれる”。川も凍り、餌もなかなか採れない。お腹をすかせているのを見かねた農家のヒトが、自分たちの食べるトウモロコシを、ぼくたちのために撒いてくれた。

それが、ぼくたちの命を救ったのさ。

その後、毎年餌をもらい、おかげで体力が付き、仲間はどんどん増えてきた。10年前には本当の「千（1,000）羽鶴」になったし、今は1,800羽くらいいる。ほかに、中国とロシアでヒナを育て、中国や朝鮮半島で冬を越す仲間がいるから、全部で世界に3,000羽ほどになる。

こんなぼくたちに、ヒトはいろいろ名前をつけて呼んでいるね。たとえば、絶滅危惧種。これは、平成5年に「種の保存法」という法律ができたときから使われている。でも、それ以前はもっと絶滅しそうだった。

そこで、昭和10年に天然記念物、昭和27年に特別天然記念物という肩書をつけて、ヒトはぼくたちを助けようとした。

ところで、今日は年の初め。あけましておめでとう！

正月は、ぼくたちの出番だ。ほら、ツルは千年、カメは万年！というだろ。

ぼくたちは正月にふさわしい長生きのシンボルなのさ。でも、ホントの寿命は、動物園などでだいに育てられて50歳ほど、野生なら20～30歳くらいだ。

みんなは、折り紙で鶴を折れるかな？折り紙の基本で、日本独自のものだよ。江戸時代からすでにあっただらしい。それを千個集めた千羽鶴は、広島の前原で亡くなった少女の願いをもとに有名になった。

正月にちなみ、長寿と平和への思いを込めて、皆で折り鶴を一つ折ってはどうかだろ。（文：正富宏之）



千羽鶴